岡山大学附属教育実践総合センター紀要，第9巻（2009），pp.1-8

原　著

中学生の社会的スキルと認知的評価がストレス反応に及ぼす影響

西村大樹，東條光彦　（岡山大学大学院教育学研究科）

本研究の目的は、中学生を対象に、社会的スキルとストレッサーに対する認知的評価、ストレス反応の関係性を明らかにし、社会的スキルが、認知的評価のストレス反応への影響を調整する効果(調整効果)について検討することであった。その結果、ストレス反応に対する社会的スキルと認知的評価の影響には男女差が認められ、男子ではストレス反応と「関係参加行動」・「関係維持行動」という基礎的なスキルの間に負の関連が認められた。一方女子では、それら 2 つの基礎的なスキルに加え、認知的評価の「コントロール可能性」とストレス反応の間にも負の関連が、「関係向上行動」とストレス反応との間には正の関連が認められた。調整効果については、女子において部分的に確認された。

キーワード：junior high school students, social skills, cognitive appraisal, stress responses

問題と目的

文部科学省[1]によると、平成19年度の中学校における不登校の中学生は105,328人であり、依然として出現率は高いといえる。近年、これら不登校を考える際の重要な要因の1つとして、学校ストレスが取り上げられており、適応指導教室に通級している生徒は学校に登校している生徒に比べ、友人ストレッサーを多く経験し、嫌悪性も高いことが示されている[2]。また、一般の生徒に比べ“不登校予備群”と考えられる生徒は、対人ストレッサー得点やストレス反応得点が高いことも報告されている[3]。さらに、不登校だけでなく、ストレス反応が高い場合には学校不適応感も高くなることが明らかにされている[4, 5]。これらのことから、生徒のストレス反応を軽減させることは、不登校などの不適応行動の予防を考える際に重要であろう。

ストレス反応を軽減させる個人内要因の一つとしてストレッサーに対する認知的評価（以下、認知的評価）があげられる。認知的評価とは、ある出来事が個人にとってどの程度脅威的であるかというストレッサーの脅威性あるいは影響性などに関する評価と、個人がある出来事に対して対処可能なものであるかどうかというストレッサーに対するコントロール可能性に関する評価に分類される[6]。ストレッサーを経験しても、脅威性や影響性を低く評価し、コントロール可能性を高く評価すれば、ストレス反応の表出は少ないと考えられる。実際、中学生において、認知的評価はストレス反応と関連している[7-10]。

このように認知的評価はストレス反応を規定する要因として重要ではあるものの、実際の介入を考えた場合には、認知発達が十分ではない子どもを対象に、内的変数である認知的評価を直接的に改善することは難しいことが指摘されている[11]。

一方、中学生のストレス反応を軽減させるためのアプローチとして、Social Skills Training（社会的スキル訓練）が注目され、社会的スキルの獲得によってストレス反応[12]や孤独感[13]が軽減することが示されている。また、戸ヶ崎・岡安・坂野[14]は、他者との社会的関係を始めるためのスキルが低い生徒はストレッサーにさらされることが多く、ストレス反応も強く表出していること、社会的スキルをバランスよく備えている生徒はストレス反応の表出が弱いことを明らかにしている。さらに、中学生の社会的スキルの不足が、後の抑うつを予測することも明らかにされている[15]。

このように、社会的スキルとストレッサーやストレス反応との関係については示されている。しかしながら、社会的スキルがストレス過程のどの部分に影響を及ぼすのかについての検討は不十分であり[14]、認知的評価と社会的スキルとの関係性を検討した研究はほとんどなされていない。筆者の知る限り、上地・竹中・鈴木・岡[16]によって報告され、認知的評価には、相手とより良い関係を築いていくためのスキルが影響を及ぼしていることが示唆されているが、説明率の低さや先行研究の少なさを考慮すると、いまだ仮説の域を出ないと言える。また、上地ら[16]の研究は小学生を対象に行われており、中学生を対象に社会的スキルと認知的評価の関係を検討した研究は行われていない。中学生の不

適応行動の予防や解決を考える際に、ストレス反応に影響を及ぼすと考えられる要因（認知的評価、社会的スキル）について考え、それぞれの関係性について明らかにすることには意義があると考えられる。

そこで本研究では、中学生における社会的スキルと認知的評価、ストレス反応の関係性を明らかにし、社会的スキルが、認知的評価のストレス反応への影響を調整する効果（調整効果）について検討することを目的とする（Figure 1）。

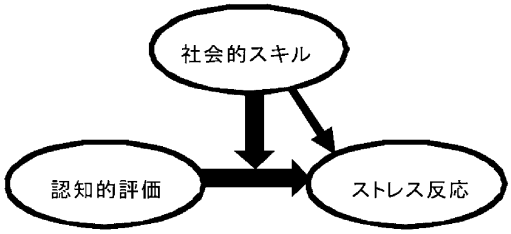

Figure 1　本研究で検討を行うモデル

方　法

調査対象者と手続き

A 県内の中学生 309 名（男子 161 名、女子 148 名）を対象に自己記入式の質問紙調査を行った。調査の冒頭で回答内容は研究以外の目的では使用されないことを説明した。調査はすべて無記名で行われ、クラス担任が調査用紙を配布し、記入を求め回収した。最終的に、記入ミスや記入漏れがなかった 278 名（男子 147 名、女子 131 名：有効回答率 89.97%）を分析対象とした。

質問紙の構成

中学生用認知的評価尺度

中学生が日常の学校生活の中で経験するストレッサーに対して抱く認知的評価を測定することを目的として、三浦 [4]によって作成された中学生用認知的評価尺度を用いた。この尺度は「影響性（7 項目；以下 INF）」、「コントロール可能性（7 項目；以下 CON）」の下位尺度から構成されている。各項目についてそれぞれ 4 件法（“ぜんぜんそう思わない”から“とてもそう思う”）で回答を求めた。

中学生用ストレス反応尺度

中学生が表出するストレス反応について測定することを目的として、三浦 [4]によって作成された中学生用ストレス反応尺度を用いた。この尺度は 4 つの下位尺度からなり、「抑うつ・不安（5 項目；以下 DEP）」、「無気力（5 項目；以下 HEL）」、「身体的反応（5 項目；以下 PHY）」、「不機嫌・怒り（5 項目；以下 IRP）」から構成されている。各項目についてそれぞれ 4 件法（“ぜんぜんそう思わない”から“とてもそう思う”）で回答を求めた。

中学生用社会的スキル尺度

中学生の社会的スキルを測定することを目的として戸ヶ崎ら [14]によって作成された中学生用社会的スキル尺度を用いた。この尺度は 3 つの下位尺度から構成され、「関係参加行動（8 項目；以下 BP）」、「関係維持行動（7 項目；以下 BM）」、「関係向上行動（10 項目；以下 BD）」から構成されている。各項目についてそれぞれ 4 件法（“ぜんぜんそうでない”から“いつもそうだ”）で回答を求めた。

Table 1　各尺度の男女ごとの平均得点（標準偏差）と t 検定結果

	男子 (n=147)		女子 (n=131)			
	平均	(標準偏差)	平均	(標準偏差)	t	p
認知的評価						
INF	11.13	(5.54)	12.37	(6.28)	-1.76	†
CON	10.25	(4.45)	9.89	(4.13)	0.69	
ストレス反応						
DEP	2.97	(3.80)	5.27	(4.43)	-4.66	**
HEL	5.31	(4.46)	5.56	(4.34)	-0.49	
PHY	3.30	(4.04)	4.21	(4.19)	-1.84	†
IRP	4.39	(5.01)	5.57	(5.05)	-1.96	†
社会的スキル						
BP	19.92	(4.47)	19.83	(4.81)	0.16	
BM	16.51	(4.29)	17.22	(3.50)	-1.50	
BD	17.66	(5.78)	20.44	(5.19)	-4.20	**

†p<.10, ** p<.01

Note. INF=影響性；CON=コントロール可能性；DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り；BP=関係参加行動；BM=関係維持行動；BD=関係向上行動

結　果

本研究の分析にはSPSS（ver.11.5）を使用した。

男女差の検討

今回使用した3尺度について、性差を検討するために、t検定を行った（Table 1）。その結果、中学生用認知的評価尺度の「影響性」において、女子は男子に比べ得点が高い傾向があった（t=-1.76, p<.10）。中学生用ストレス反応尺度においては、「抑うつ・不安」で女子は男子に比べ有意に得点が高く（t=-4.66, p<.01）、「身体的反応」と「不機嫌・怒り」で女子は男子に比べ得点が高い傾向があった（「身体的反応」:t=-1.84, p<.10; 「不機嫌・怒り」：t=-1.96, p<.10）。さらに、中学生用社会的スキル尺度においては、「関係向上行動」で女子は男子に比べ有意に得点が高かった（t=-4.20, p<.01）。いくつかの下位尺度において男女差が見られたため、以下の分析は男女別に行っていくこととする。

社会的スキル、ストレッサーに対する認知的評価およびストレス反応の関係性の検討

社会的スキルや認知的評価がストレス反応を予測するかどうか検討するために、中学生用社会的スキル尺度の各下位尺度、および中学生用認知的評価尺度の各下位尺度を説明変数、中学生用ストレス反応尺度の各下位尺度を目的変数とした重回帰分析を男女別に行った（男子：Table 2、女子：Table 3）。重回帰係数は、ストレス反応尺度の全ての下位尺度において、男女ともに1%水準で有意であった（男子：R=.46～.58; 女子:R=.39～.42）。男子では、「抑うつ・不安」、「無気力」、「身体的反応」においては、「関係参加行動」と「関係維持行動」で標準偏回帰係数が有意な負の値を示した。「不機嫌・怒り」においては、「関係維持行動」で標準偏回帰係数が有意な負の値を示した。女子では、「抑うつ・不安」においては、「コントロール可能性」の標準偏回帰係数が有意な負の値を示し、「関係向上行動」では標準偏回帰係数が有意な正の値を示した。「無気力」と「身体的反応」においては、「コントロール可能性」と「関係維持行動」で標準偏回帰係数が有意な負の値を示し、「関係向上行動」では標準偏回帰係数が有意な正の値を示した。「不機嫌・怒り」においては、「コントロール可能性」、「関係参加行動」そして「関係維持行動」で標準偏回帰係数が有意な負の値を示した。なお、多重共線性の有無を検出するVariance Inflation Factor（VIF: 分散拡大要因）を算出したところ、その値は最大で1.46であり、多重共線性の可能性はないと考えられた。

男子では、「影響性」×「関係参加行動」、「影響性」×「関係維持行動」、「コントロール可能性」×「関係参加行動」、「コントロール可能性」×「関係維持行動」の組み合わせの時に、中学生用ストレス反応尺度のすべての下位尺度において、「関係参加行動」と「関係維持行動」の主効果が1%水準で有意であり、「関係参加行動」や「関係維持行動」が低い男子生徒の方が高い男子生徒に比べ、全てのストレス反応の得点が有意に高かった。

Table 2　社会的スキル、認知的評価からストレス反応への重回帰係数と標準偏回帰係数（男子）

	認知的評価		社会的スキル			
	INF	CON	BP	BM	BP	R (R^2)
DEP	0.02	0.01	-0.44 **	-0.23 **	0.07	0.58 (0.34)**
HEL	0.01	-0.12	-0.33 **	-0.19 *	0.03	0.46 (0.21)**
PHY	0.00	-0.08	-0.29 **	-0.28 **	0.07	0.49 (0.24)**
IRP	-0.02	-0.05	-0.14	-0.44 **	0.05	0.52 (0.27)**

* p<.05, ** p<.01

Note. INF=影響性；CON=コントロール可能性；DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り；BP=関係参加行動；BM=関係維持行動；BD=関係向上行動

Table 3　社会的スキル、認知的評価からストレス反応への重回帰係数と標準偏回帰係数（女子）

	認知的評価		社会的スキル			
	INF	CON	BP	BM	BP	R (R^2)
DEP	0.04	-0.31 **	-0.17	-0.13	0.35 **	0.42 (0.17)**
HEL	0.03	-0.27 **	-0.01	-0.31 **	0.22 *	0.40 (0.16)**
PHY	0.05	-0.20 *	-0.17	-0.26 **	0.26 **	0.40 (0.16)**
IRP	0.05	-0.21 *	-0.20 *	-0.18 *	0.05	0.39 (0.15)**

* p<.05, ** p<.01

Note. INF=影響性；CON=コントロール可能性；DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り；BP=関係参加行動；BM=関係維持行動；BD=関係向上行動

Table 4　影響性（INF）と関係向上行動（BD）の高低別の平均値（標準偏差）と分散分析結果（女子）

	INF						
	高群		低群				
	BD		BD				
	高群 n=44	低群 n=25	高群 n=29	低群 n=33	主効果 (INF)	主効果 (BD)	交互作用
DEP	5.91 (4.82)	5.44 (4.64)	5.10 (4.07)	4.42 (4.06)	1.32	0.52	0.02
HEL	6.16 (4.60)	4.56 (3.79)	5.00 (4.54)	6.03 (4.19)	0.04	0.13	2.88
PHY	5.09 (4.55)	3.40 (3.75)	2.97 (3.01)	4.73 (4.65)	0.29	0.00	5.46 *
IRP	5.34 (5.37)	6.72 (5.40)	3.93 (3.78)	6.45 (5.09)	0.88	4.78 *	0.41

Note. DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り　　* p<.05

Table 5　コントロール可能性（CON）と関係参加行動（BP）の高低別の平均値（標準偏差）と分散分析結果（女子）

	CON						
	高群		低群				
	BP		BP				
	高群 n=43	低群 n=18	高群 n=40	低群 n=30	主効果 (CON)	主効果 (BP)	交互作用
DEP	3.86 (4.02)	5.44 (4.03)	6.10 (4.81)	6.07 (4.39)	0.70	0.95	1.57
HEL	4.28 (4.19)	5.00 (3.93)	6.23 (4.39)	6.87 (4.37)	2.33	1.22	0.00
PHY	3.26 (3.44)	4.39 (4.72)	4.33 (3.95)	5.30 (4.97)	0.16	2.25	0.26
IRP	3.84 (4.33)	5.39 (5.52)	6.03 (5.17)	7.57 (4.92)	1.60	4.00 *	0.32

Note. DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り　　* p<.05

Table 6　コントロール可能性（CON）と関係維持行動（BM）の高低別の平均値（標準偏差）と分散分析結果（女子）

	CON						
	高群		低群				
	BM		BM				
	高群 n=36	低群 n=35	高群 n=33	低群 n=27	主効果 (CON)	主効果 (BM)	交互作用
DEP	4.97 (4.59)	4.66 (3.56)	4.97 (4.59)	6.81 (4.89)	1.94	0.98	1.94
HEL	5.17 (4.93)	4.80 (3.15)	4.76 (3.64)	8.07 (4.90)	3.77	4.00 *	6.23 *
PHY	4.14 (4.00)	3.83 (3.89)	3.55 (4.15)	5.59 (4.72)	0.64	1.40	2.59
IRP	5.42 (5.24)	4.69 (4.60)	4.24 (4.19)	8.56 (5.25)	2.50	4.42 *	8.76 *

Note. DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り　　* p<.05

Table 7　コントロール可能性（CON)と関係向上行動（BD)の高低別の平均値（標準偏差）と分散分析結果（女子）

	CON						
	高群		低群				
	BD		BD				
	高群 n=43	低群 n=28	高群 n=30	低群 n=30	主効果 (CON)	主効果 (BD)	交互作用
DEP	5.28 (3.92)	4.11 (4.31)	6.03 (5.30)	5.57 (4.26)	1.99	1.09	0.20
HEL	5.19 (4.46)	4.68 (3.59)	6.43 (4.72)	6.07 (4.40)	2.93	0.32	0.01
PHY	4.02 (3.99)	3.93 (3.89)	4.57 (4.35)	4.37 (4.71)	0.43	0.04	0.00
IRP	4.77 (4.76)	5.50 (5.20)	4.80 (4.99)	7.57 (5.05)	1.42	3.94 *	1.33

Note. DEP=抑うつ・不安；HEL=無気力；PHY=身体的反応；IRP=不機嫌・怒り　　* p<.05

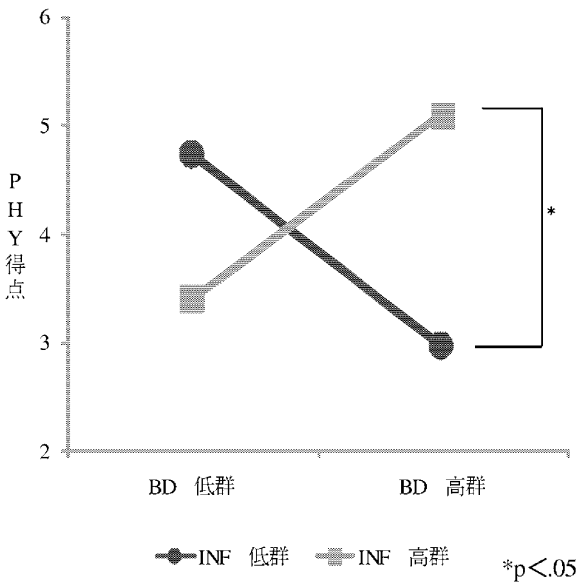

Figure 2　影響性（INF）× 関係向上行動（BD）の組み合わせ時の、身体的反応（PHY）得点における単純主効果（女子）

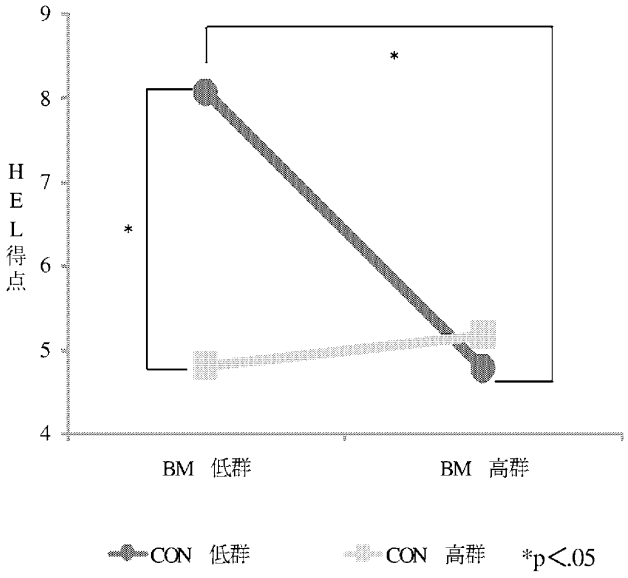

Figure 3　コントロール可能性（CON）× 関係維持行動（BM）の組み合わせの時の、無気力（HEL）得点における単純主効果（女子）

女子では、「影響性」×「関係参加行動」と「影響性」×「関係維持行動」の組み合わせの時には、主効果も交互作用も有意ではなかった。「影響性」×「関係向上行動」の組み合わせの時に（Table 4）、「不機嫌・怒り」において「関係向上行動」の主効果が有意であり、「関係向上行動」低群は高群より「不機嫌・怒り」得点が高かった。また、「身体的反応」において交互作用が有意であった。そこで単純主効果の検討を行ったところ（Figure 2）、「関係向上行動」高群では、「影響性」高群は低群より「身体的反応」得点が高かった。「コントロール可能性」×「関係参加行動」の組み合わせの時には（Table 5）、「不機嫌・怒り」において「関係参加行動」の主効果が有意であり、「関係参加行動」低群は高群より「不機嫌・怒り」得点が高かった。「コントロール可能性」×「関係維持行動」の組み合わせの時には（Table 6）、「無気力」と「不機嫌・怒り」において交互作用が有意であった。そこで単純主効果の検討を行ったところ（「無気力」：Figure 3、「不機嫌・怒り」：Figure 4）、「関係維持行動」低群では、「コントロール可能性」低群は高群より「無気力」得点と「不機嫌・怒り」得点が高かった。また、「コントロール可能性」低群では、「関係維持行動」低群は高群より「無気力」得点と「不機嫌・怒り」得点が高かった。「コントロール可能性」×「関係向上行動」の組み合わせの時には（Table 7）、「不機嫌・怒り」において「関係向上行動」の主効果が有意であり、「関係向上行動」低群は高群より「不機嫌・怒り」得点が高かった。

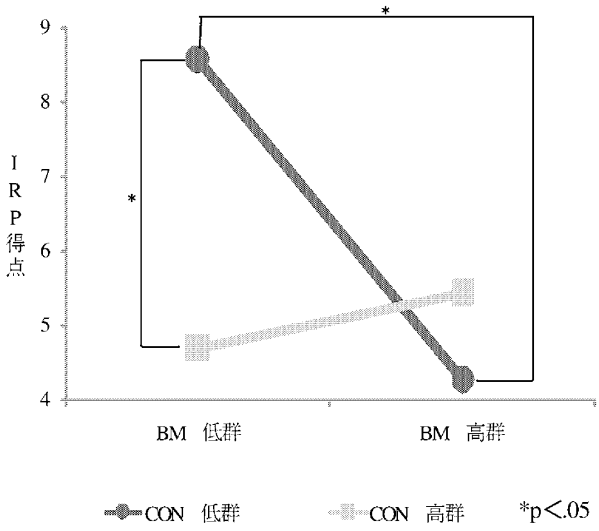

Figure 4　コントロール可能性（CON）× 関係維持行動（BM）の組み合わせ時の、不機嫌・怒り（IRP）得点における単純主効果（女子）

考　察

本研究の目的は、社会的スキルが、認知的評価のストレス反応への影響を調整する効果（調整効果）について検討することであった。

まず、男子に比べ女子の方が、ストレッサーの影響性を高く評価し、より強いストレス反応を表出している傾向がることが示された。これは先行研究の結果とほぼ一致しており[17, 18]、中学生の一般的傾向であると

考えられるであろう。また、男子に比べの女子の方が、「関係向上行動」得点が有意に高かった。この結果は、他者への気遣いや配慮と関連したスキルが女子の方が優れているという金山ら[19]の結果と一致しており、中学生では女子のほうが、友人に対して気遣いや配慮を行い、友人関係をよりよいものにしていくための高度なスキルを備えていると捉えることができる。

男子では、「関係参加行動」と「関係維持行動」の得点の高さが、「抑うつ・不安」、「無気力」、「身体的反応」のストレス反応の得点の低さを予測し、「関係維持行動」の得点の高さは「不機嫌・怒り」のストレス反応の得点の低さも予測することが明らかとなった。さらに、「関係参加行動」や「関係維持行動」の得点が高い生徒は低い生徒に比べ、全てのストレス反応の表出が少ないことも明らかとなった。「関係参加行動」とは人間関係を形成するために必要とされるスキルであり、「関係維持行動」とは作られた人間関係を続けていくために必要なスキルである。丸山[20]が示唆しているように、これらのスキルが不足することで円滑な友人関係を送ることが困難になり、友人関係ストレッサーが増加し、さらに友人からのソーシャルサポートが得にくいために、さまざまなストレス反応を表出すると考えられる。男子中学生においてストレス反応の表出を抑制するためには、人間関係を作り・持続していくためのスキルを獲得させ、使用させることが重要になってくるであろう。

女子では、「コントロール可能性」の得点の高さが、ストレス反応の各下位尺度の得点の低さを予測した。「コントロール可能性」の得点が高い生徒、つまりストレス事態を何とか乗り切ることができると評価する生徒がストレス反応の表出が少ないという結果は、三浦・坂野[9]や三浦・上里[10]の結果と一致しており、妥当であろう。

また女子では、「関係参加行動」の得点の高さが「不機嫌・怒り」のストレス反応の得点の低さも予測し、さらに、「関係維持行動」の得点の高さが、「無気力」、「身体的反応」、「不機嫌・怒り」のストレス反応の得点の低さを予測することが明らかとなった。この結果は、人間関係を作り・持続していくためのスキルを備えている生徒は、さまざまなストレス反応の表出が少ないことを表しており、男子生徒とも類似した結果であった。このことから、張替・上里[21]が示唆したように、本研究においても中学生にとって「関係参加行動」と「関係維持行動」という基本的なスキルを獲得、表出することの重要性が示されたといえよう。

しかしながら、興味深いことに、女子生徒において「関係向上行動」の得点の高さは、「抑うつ・不安」、「無気力」、「身体的反応」のストレス反応の得点の高さを予測した。この結果は、「関係向上行動」が高いと心身の疲労感が強くなるという張替ら[21]の結果を支持するものであったが、「関係向上行動」が高い子どもはクラス内での人気が高こと[22]や向社会的スキルが高い生徒はストレス反応の表出が少ないこと[5]を考慮すると、一見矛盾した結果であるといえる。「関係向上行動」が高い生徒とは、友人に対して気遣いや配慮を行いながら友人と接することができる生徒である。こういった特徴は、過剰適応の外的側面、つまり他者配慮や期待に沿う努力、人からよく思われたい欲求[23]と重複するだろう。この過剰適応の外的側面は、学校適応感と正の関連があるが、ストレス反応[23]や抑うつ傾向[24]とも正の関連があることが示されているように、適応的な側面と非適応的な側面があると考えられている[24]。つまり、「関係向上行動」が高い生徒は、仲間からは受け入れられるためにクラス内での人気は高いかもしれないが、過剰適応的な傾向があるために、自分の気持ちや意見を主張することが少なく、他者からの受容を優先して外的適応を図っているがゆえに、ストレス反応は高いのかもしれない。このことは、「関係向上行動」が必ずしも友人関係満足度と関連していないこと[25]からも支持されるであろう。女子生徒においてストレス反応の低減を考える際には、“適切な”「関係向上行動」を獲得・使用させること、もしくは、「関係向上行動」を獲得・使用させるとともに、主張性スキルなどもトレーニングする必要があるだろう。

さらに女子では、「身体的反応」においては「関係向上行動」と「影響性」の間に交互作用が見られ、「関係向上行動」を高く評価した生徒の中で、ストレッサーの「影響性」を高く評価した生徒は低く評価した生徒に比べ、より「身体的反応」を表出したことが示された。つまり、友人に対して気遣いや配慮を行うことができる生徒がストレッサーの影響を強く感じた時に、身体症状を訴えやすいということである。また、「無気力」と「不機嫌・怒り」においては、「関係維持行動」と「コントロール可能性」の間に交互作用が見られ、「関係維持行動」を低く評価した生徒の中で、ストレッサーの「コントロール可能性」を高く評価した生徒は低く評価した生徒に比べ、「無気力」と「不機嫌・怒り」のストレス反応の表出が少なかった。さらに、「コントロール可能性」を低く評価した生徒の中で、「関係維持行動」を高く評価した生徒は低く評価した生徒に比べ、「無気力」と「不機嫌・怒り」のストレス反応の表出が少なかった。つまり、たとえ関係を維持してい

くスキルが低くても、ストレッサーのコントロール可能感が高ければ、「無気力」になったりイライラすることは少なく、逆に、たとえコントロール可能感が低くても、関係を維持していくスキルが高ければ、「無気力」になったりイライラすることは少ないということを示している。これらの結果から、社会的スキルが認知的評価のストレス反応への影響を調整する効果（調整効果）は、女子生徒のみで部分的に支持されたといえるだろう。今後さらなる知見を積み上げていくことが期待される。

本研究では、社会的スキルとストレス反応との関係は、男子と女子で大きく異なっていた。この結果には、男女の友人とのつきあい方の違いが影響しているだろう。青年期の男子では友人との行動を重要視した「共有活動」が多く見られ、女子では自己開示や親密性を重視した「相互理解活動」「親密確認活動」「閉鎖的活動」が多くみられることが示されている[26]。また、女子は男子よりも、嫌われないように気を使ったり、決まった仲間と行動しようとする傾向があることも示されている[27]。これらの指摘から、男子生徒では友人と一緒に活動するための基礎的なスキルを備えていることが、安定した友人関係へとつながり、ストレス反応の表出を少なくさせると考えられる。一方、女子生徒ではそれらの基礎的なスキルを備えていることに加え、より深い人間関係を作ったり相手に気を使ったりするためのスキルがストレス反応と関連していたと考えられる。さらに、女子生徒では友人との親密さが重要になってくるため[20]、なにかしら友人とのトラブルが起きた際には、それを影響が大きくコントロール不可能なものと認知するために、よりストレス反応を表出しやすいのかもしれない。

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。まず、本研究ではストレス過程として認知的評価を用いたが、今後はコーピングも含めて考える必要があるだろう。今回、男子生徒で認知的評価とストレス反応との関連が認められなかったが、三浦・上里[8]は認知的評価はコーピングの実行を促すことにより、ストレス反応を規定していることを明らかにしている。次に、使用した尺度の問題が挙げられる。本研究では社会的スキルの尺度として自己記入式の尺度を使用したが、社会的望ましさが影響している可能性は否定できない。他者評価式の尺度を使用することでことなった結果が得られるかもしれない。さらに、上述したように、社会的スキル尺度の「「関係向上行動」」の適応的な側面と非適応的な側面については、さらなる検討を行う必要があるだろう。

謝　辞

本論文は、第一執筆者が平成 17 年度岡山大学教育学部に卒業論文として提出したものにデータを追加し、加筆・修正したものです。作成にあたり、丁寧なご指導を賜りました岡山大学田中宏二先生、多大な援助や貴重なご意見をいただきましたに教育学研究科教育臨床心理学専攻の東野真樹さんに心よりお礼申し上げます。

引用文献

1. 文部科学省　2008　平成 19 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/08/08073006/001.pdf).
2. 本間恵美子・柏谷美紀・花屋道子　適応指導教室通級生徒の対人ストレッサーとソーシャルサポート　カウンセリング研究, 38, 149-161, 2005.
3. 松井賢二　中学校の不登校傾向意識：学校ストレス、進路(キャリア)成熟、自己肯定感との関連から　新潟大学教育人間科学部紀要人文･社会科学編, 5, 251-258, 2002.
4. 三浦正江　2002　中学生の日常生活における心理的ストレスに関する研究　風間書房
5. 嶋田洋徳　1998　小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究　風間書房
6. Lazarus, R.S.・Folkman, S.　1984　Stress, appraisal, and coping　Springer
7. 水野喜子・石原金由　中学生の学業・人間関係ストレッサーに対する認知的評価とコーピングがストレス反応に及ぼす影響：受験の有無の関連性に注目して　児童臨床研究所年報, 13, 21-34, 2000.
8. 三浦正江・上里一郎　中学生の友人関係における心理的ストレスモデルの構成　健康心理学研究, 15, 1-9, 2002.
9. 三浦正江・坂野雄二　中学生における心理的ストレスの継時的変化　教育心理学研究, 44, 368-378, 1996.
10. 三浦正江・上里一郎　中学生の学業における心理的ストレス～高校受験記に実施した調査研究から～　ヒューマンサイエンスリサーチ, 8, 87-102, 1999.
11. 寺嶋繁典・日高なぎさ・宮田智基・岡田弘司・田中英高　小児のストレス・マネジメントにおける基礎研究（第２報）－ソーシャル・ス

キルのストレス軽減効果－　心身医学, 43, 185-192, 2003.
12. 江村里奈・岡安孝弘　中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究—ストレス反応と孤独感の低減効果を中心に—　日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 257, 2001.
13. 江村里奈・岡安孝弘　中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究　教育心理学研究, 51, 339－350, 2003.
14. 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二　中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係　健康心理学研究, 10, 23-32, 1997.
15. 今津芳恵　社会的スキルの欠如が抑うつに及ぼす影響—女子中学生を対象とした場合—　心理学研究, 76, 474-479, 2005.
16. 上地広昭・竹中晃二・鈴木英樹・岡浩一朗　子どもの身体活動が社会的スキルおよびストレッサーに対する認知的評価に及ぼす影響　健康心理学研究, 16, 11-20, 2003.
17. 石毛みどり・無藤隆　中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して—　教育心理学研究, 53, 356-367, 2005.
18. 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二　中学生用ストレス反応尺度の作成の試み　早稲田大学人間科学研究, 5, 23－29, 1992.
19. 金山元春・小野昌彦・大橋勉・辻本雄一・大井閑代・松井賀洋子・辻本育宏・吉田初子　中学生の社会的スキルと孤独感　広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部, 51, 289-295, 2002.
20. 丸山笑里佳　青年期の抑うつと対人関係に関する研究の概観　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　心理発達科学, 54, 103-110, 2007.
21. 張替裕子・上里一郎　社会的スキルが小学生の不登校傾向に及ぼす影響について　目白大学人間社会学部紀要, 3, 121-132, 2003.
22. 戸ヶ崎泰子・坂野雄二　母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響：積極的拒否型の養育態度の観点から　教育心理学研究, 45, 173-182, 1997.
23. 石津憲一郎・安保英勇　中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響　教育心理学研究, 56, 23-31, 2008.
24. 石津憲一郎・安保英勇　中学生の抑うつ傾向と過剰適応—学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて—　東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55, 271-288, 2007.
25. 塚本貴文・濱口佳和　親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響—中学生の場合—　発達臨床心理学研究, 15, 45－55, 2003.
26. 榎本淳子　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究, 47, 180-190, 1999.
27. 長沼恭子・落合良行　同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係　青年心理学研究, 10, 35-47, 1998.

Title：Influence on Stress Reactions of Social Skill and Cognitive Appraisal in Junior High Students

Hiroki Nishimura, Mitsuhiko Tojo (Okayama University Graduate School of Education)

Abstract：The purpose of this study was to determine the relations between social skills and cognitive appraisal and stress responses in junior high school students. Moreover, we examined whether social skills coordinate influence on stress responses of cognitive appraisal (coordination effects). As results, gender differences were observed in influences on stress responses of cognitive appraisal and social skills. In males, stress responses were negatively associated with fundamental social skills such as “Behavior for participating in relations” and “Behavior for maintaining relations”. In female sample, stress responses had negative associations with "controllability" of cognitive appraisal in addition to these fundamental social skills. Furthermore, stress responses were positively association with “Behavior for developing relations” in female. The coordination effects were confirmed in female partially. These findings were discussed.

Keywords：junior high school students, social skills, cognitive appraisal, stress responses